

社会的養護の新展開 13

—親と離れて暮らす子どもたちの養育とその後 1—

浦田 雅夫
京都芸術大学

「雨止んでひと傘を忘る。兎角人間は時の流れに過ぎし日のことを忘れがちなものです。」

いつものようにテレビから桂小金治が語っている。いろんな事情から家族生き別れになった方々の依頼により、番組がその家族を探すというものだ。私はいつも祖母の傍らで、その番組を見ていた。昭和の典型的なお涙ちょうだい番組だったのだろうが、子どもながらに、世のなかにはさまざまな事情の家族がいるものだと知った。それと同時に、涙のご対面をする親子をみて、涙する我が祖母。あなたの人生はどうだったのかと、ふと思ったりもした。いま、思えば、なんという子どもだろうと思う。

母がよく連れて行ってくれた四天王寺さんでは、参道に傷痍軍人がゴザを敷いて何かを訴えているのを目にしたことがある。ホームレスとも違ったが、みな皿や何かの入れものを用意し、お金を募っていた。昭和 50 年代。戦争など遠い昔であったが、ここだけは違った。軍服を着て片手、片足のない人を見るのが痛ましかったのを覚えている。

そんなことも今の自身の生き方に影響しているんだろうと思う。前回までは、戦後を生き抜いた孤児の方々について書かせていただいた。命からがら生き抜いた、まさにサバイバーの方々の語りには圧倒された。自暴自棄になり、社会からも排除されたと強烈に感じていた O さん（元戦争孤児）だが、施設で出会った職員との関係性から、人を見る目、社会を見る目に変化したと語られた。

社会的養護の状況は、災害や戦争、不況などそのときどきの社会の状況を反映し、近年は少子化にもかかわらず児童虐待の増加に伴い、児童虐待を理由とする入所措置が増加している。また、養育のあり方については、里親家庭または家庭的な環境のなかでの養育が求められている。

さて、令和の若者のなかには、それぞれが苦勞を負いながらも、お涙ちょうだいの感動ポルノ路線ではなく、今様に YouTube で軽快に社会的養護について語っている方々がいるので紹介しておきたい。

映像作家、絵本作家の西坂來人さん、モデルのブローハン聡さん、ACHA プロジェクト代表の山本昌子さんだ。メディアが社会的養護など重い話題について取り上げる際は、どう

しても暗いイメージがつきものだ。しかし、この3人のYouTubeは軽快なアップテンポの曲と笑顔から始まる。

一方、それでいてなかみはしっかりと社会的養護を取り巻く状況や退所者のニーズを伝えている。「施設で生活している人ってかわいそうだと思っていましたが、見方が変わりました」と動画を閲覧した学生は話す。

彼らは、YouTubeでの動画発信からソーシャルアクションにまでつなげていることも素晴らしい。「児童虐待は保護されて終わりじゃない。」と訴えている。

施設生活で職員との関係性から生きる価値を再確認した元戦争孤児のOさんの語り。時代が変わって虐待的環境を生き抜いたサバイバー3人の発信。どちらも社会への大きなメッセージであり、ケアのあり方、その後を考える上で重要であると思う。



THREE FLAGS -希望の狼煙-

https://www.youtube.com/channel/UCcfuoC8l6QPvK2cqLCQ0_JQ